

# おおきなやねのちいさないえ

小布施町における開かれた住宅の提案

東京大学工学部都市工学科都市計画コース B4

菊地 穂澄 橋 俊輔 星野 祐輝

## プロジェクト概要

- ・長野県小布施町の農住混在地域において、「住み開き」を軸にした暮らしを実現できる戸建て住宅を設計・提案する
- ・With/Post COVID-19 における農村コミュニティのあり方を提案する

## 基礎データ

### 位置

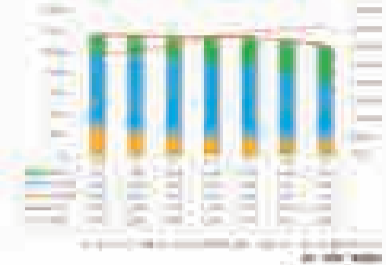


小布施町は長野県北東部に位置する。南部を流れる松川の扇状地にあたり、周囲は山々で囲まれる



対象敷地は小布施町の南西部に位置し、中心部からは車で5分程度

### 人口



人口：11,025人（2021年3月時点）  
年間観光客数は111万人を超える（2008年）  
人口は減少傾向にあったが、近年は子育て世帯の流入に伴い少子高齢化に歯止めがかかっている

データ出典：「統計でみる小布施町の姿」より

## 小布施での取り組み

### 住み開きの取り組み

#### オープンガーデン

「外はみんなのもの、うちは自分たちのもの」というコンセプトのもと、個人の庭を一般開放している

オープンガーデンの様子



画像出典：OBUSE Open-Garden HPより

#### まちじゅう図書館

町中のお店や一般の方の住宅のちょっとしたスペースに仕事や趣味の本を置き、訪れた人と本を介した交流を図る取り組み



まちじゅう図書館のパンフレット

画像出典：まちとよテラス HPより

### 街並み景観への取り組み

#### 景観形成基準

景観形成重点地区が一部定められており、周辺環境と調和したデザインが求められている。

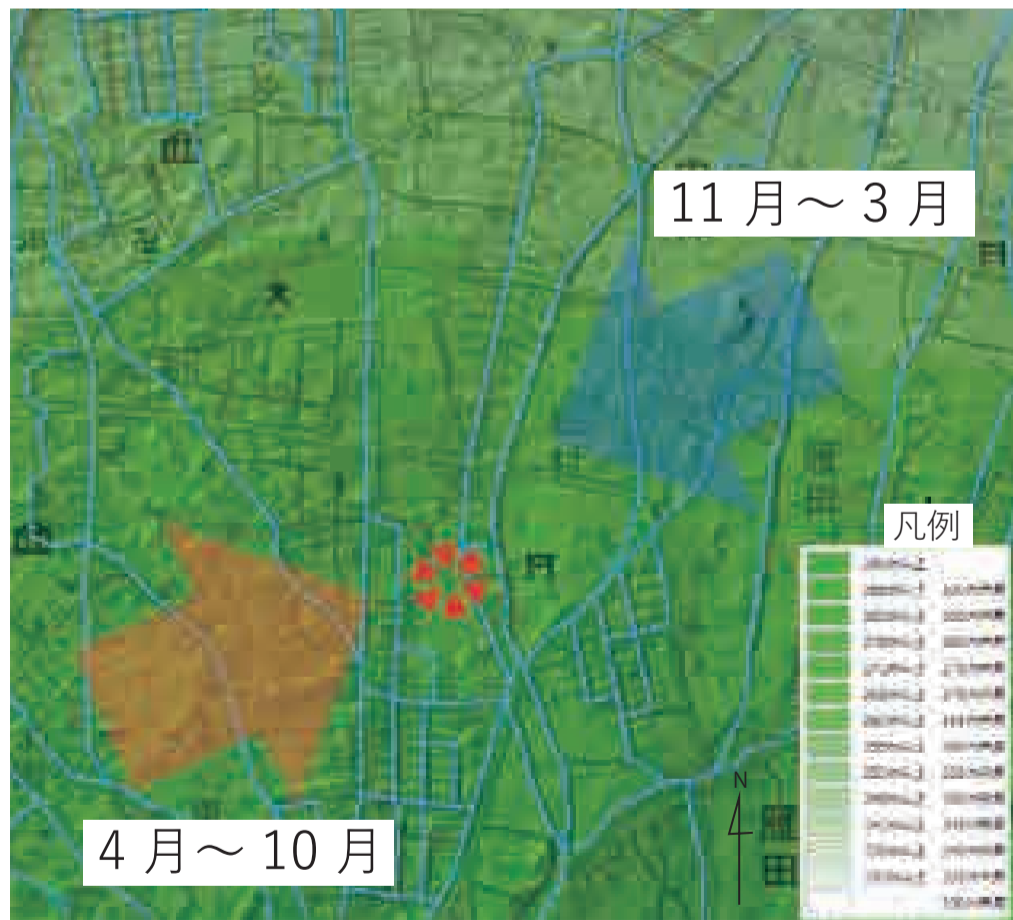
#### 街並み修景事業

住民主体によって創出された、新旧合わせた建築物の街並み景観

### 産業

ぶどうやりんごといった果樹栽培がさかん  
特産品として栗が有名  
農業資源を生かした観光産業も特徴  
→対象敷地付近には多くのフルーツ農園が並ぶ北信濃くだもの街道が走っている

## 地理的条件 1/10000 平面図



11月～3月

4月～10月

松川の扇状地に位置し、南から北にかけて3%程度の勾配あり  
農業用水路が張り巡らされ、敷地前の道路にも水路が通る  
冬は東北東、夏は西南西の風が吹く

まとめ：  
豊かな自然環境にめぐまれている  
→設計でいかにそれらを良好な環境づくりに生かす

## 歴史文脈 1/5000 平面図



北側には古い農道沿いに集落が形成されている

近年も農地の開発がところどころで行われている

畑を開発して住宅にしている

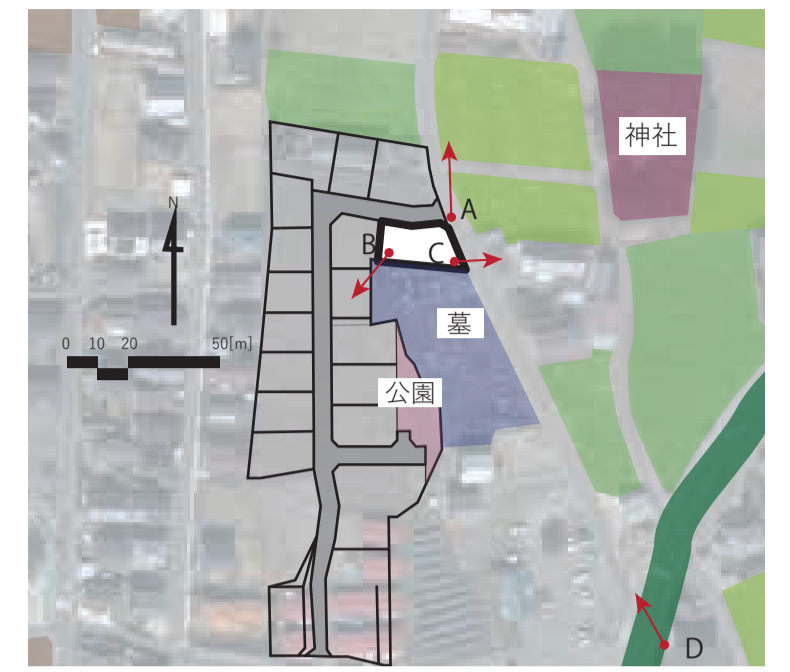
まとめ：  
敷地は北の集落と南の新規住宅をつなぐ立ち位置にある

## 周辺施設と利用者像 1/5000 平面図



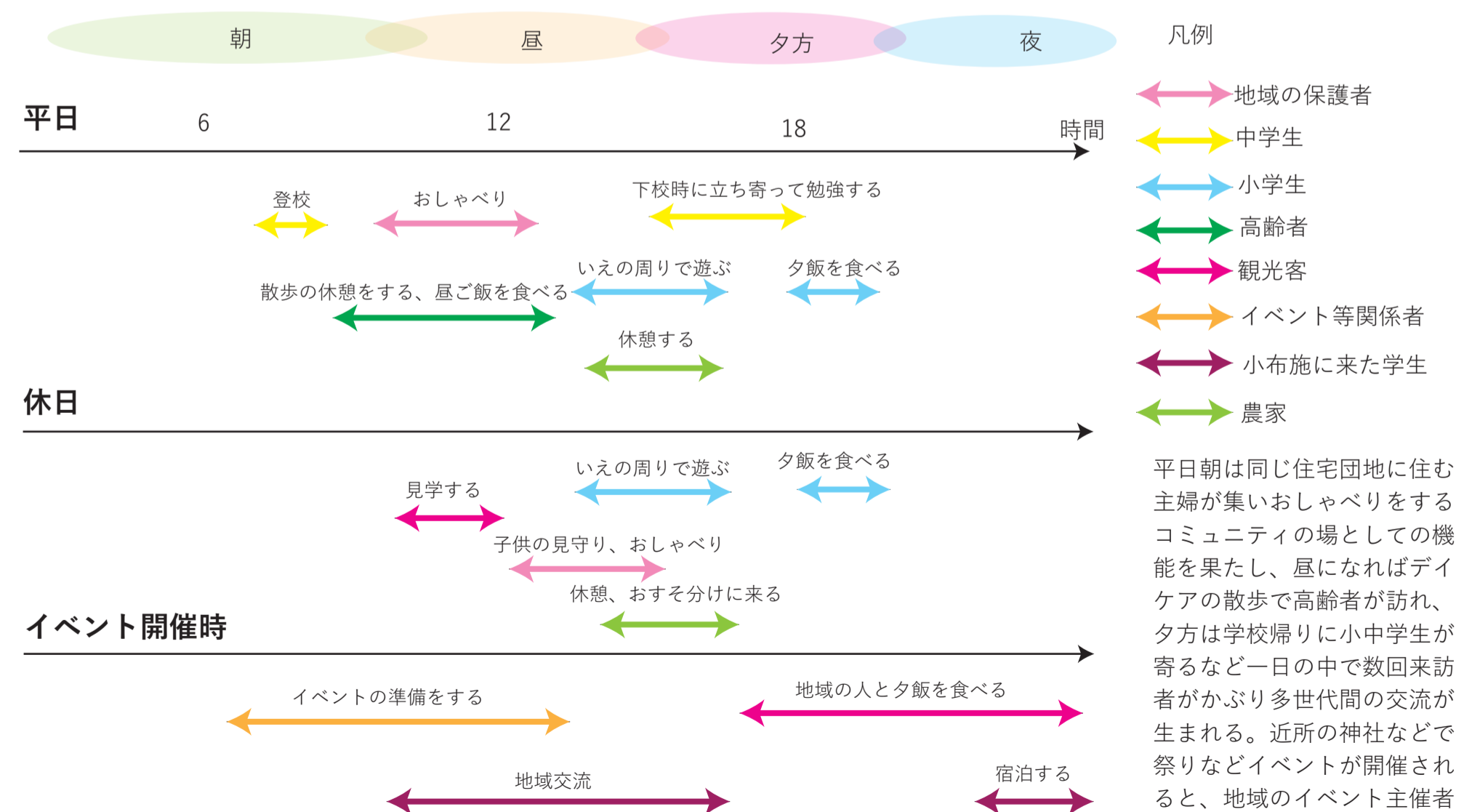
まとめ：  
周辺の施設、土地利用から多様な利用者が想定される

## 景観 1/2500 平面図



まとめ：  
住宅で視界が遮られない東側が景観上重要になる

具体的な利用イメージ（タイムライン） 地域に開かれた機能を敷地の位置におくことでどのような利用が想定されるかを時間別に書き出した



まとめ：利用者属性ごとに利用時間帯が異なる  
→いつでも誰でも自由に利用できるような空間を作る必要性がある



# コンセプト

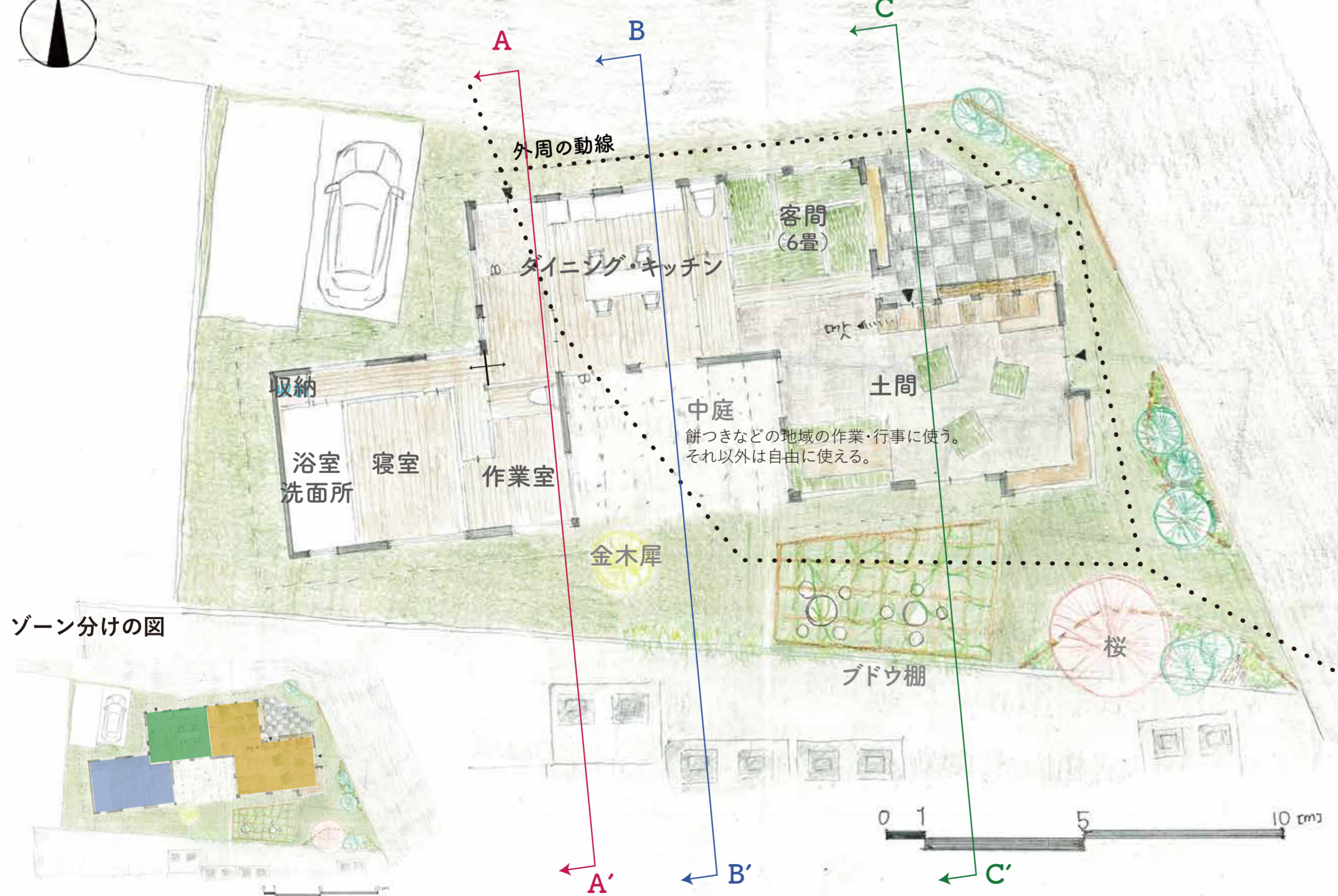


住宅をクライアントのみが利用する**わたしのいえ**、クライアントが開くことも可能な**いえのふち**、外とつながった気軽に立ち寄れる**やねのした**という3つのゾーンに分け、住むための部分をコンパクトにまとめ、大きな屋根の下のような、気軽に入ってほっと一息つける空間を生み出す

# 平面図

S=1:100

- ・クライアントのプライベートな空間をセキュリティを確保しながら最大限開くことを意識した。(不在時は「わたしのいえ」・「いえのふち」を施錠)
- ・「やねのした」はクライアント不在時においても自由に入出入りできるよう、土間空間としレベル差なく入れるようにした。
- ・+200mmのレベル差でダイニングキッチンと「わたしのいえ」をつなぎ、クライアントが日常的に使うだけでなく時には地域に開くことができるようにした。



ゾーン分けの図



わたしのいえ    いえのふち    やねのした

## わたしのいえ

- 閉ざす機能を最小限にー 寝室、水回りと作業室のみ
- 暮らしが周りににじみ出さずー キッチンはいえのふち、くつろぎ空間はやねのしたへ

## いえのふち

- 招く人に応じた拡張ー ダイニングキッチンから中庭、やねのしたへ

## やねのした

- 外のような内ー レベル差なく入れる、軒下のような空間
- さまざまに使われる可変空間ー ある時は図書館、ある時はおしゃべりの場所、仕切って寝泊りもできる

## やねのしたと周辺

- 開かれた場をつなぐー 南側に点在するオープンガーデンと北側の公共施設をつなぐ
- 新規宅地と地域の橋渡しー 町に移り住む家族が、地域とつながるきっかけになる
- 住み開きが広がるきっかけにー 土間、出窓、本棚などのしつらえが住み開きのパターンを作る

## ▲それぞれの空間で実現する要素

# 設計の指針

## 人の動線

通り抜けの動線を「やねのした」の外周に設定し、各所で土間にアクセスできるようにした。

## 視線

敷地東部の**神社の林と山々への眺望**が確保できるよう、建物南東部の角に大きい開口をとりそれらへの視線が遮られないよう樹木を配置した。

## 香りの動線

クライアント希望の**金木犀**を中庭に配置し、**南北方向の季節風**を利用することで金木犀の香りがその周辺だけでなく、風によって屋内に吹き込むようにした。

## 墓地との関係

敷地東部では低木を植えつつ視線が通るようにした。また、西部において墓地を横切り南西の**公園へ向かう動線**を確保した。

## 柵

道路に対して開くために、各所に木製の柵を設けた。ここに自転車をとめることや、柵で遊べるような工夫も想定している。

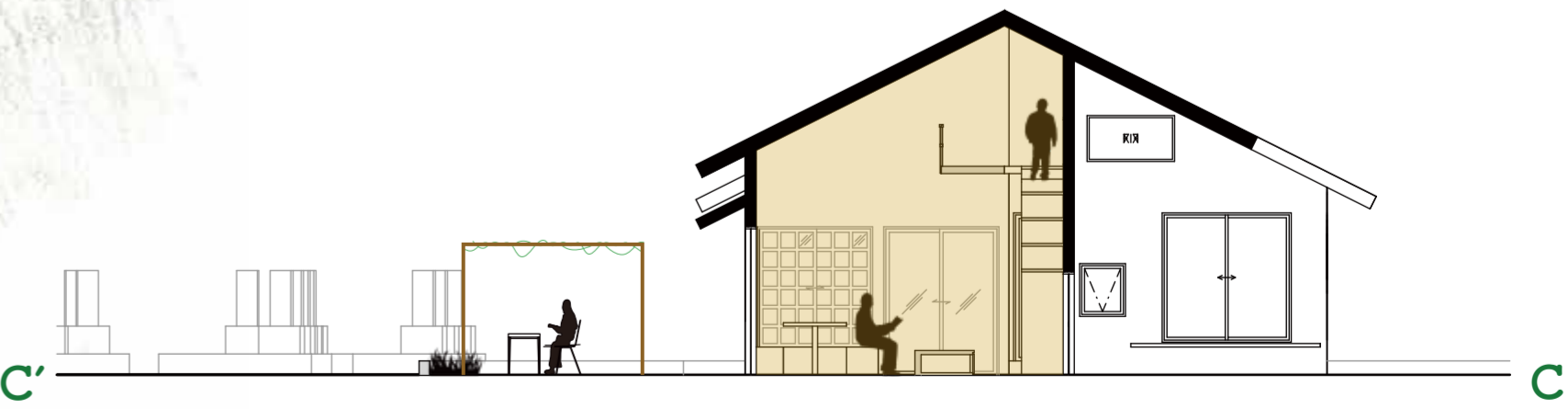
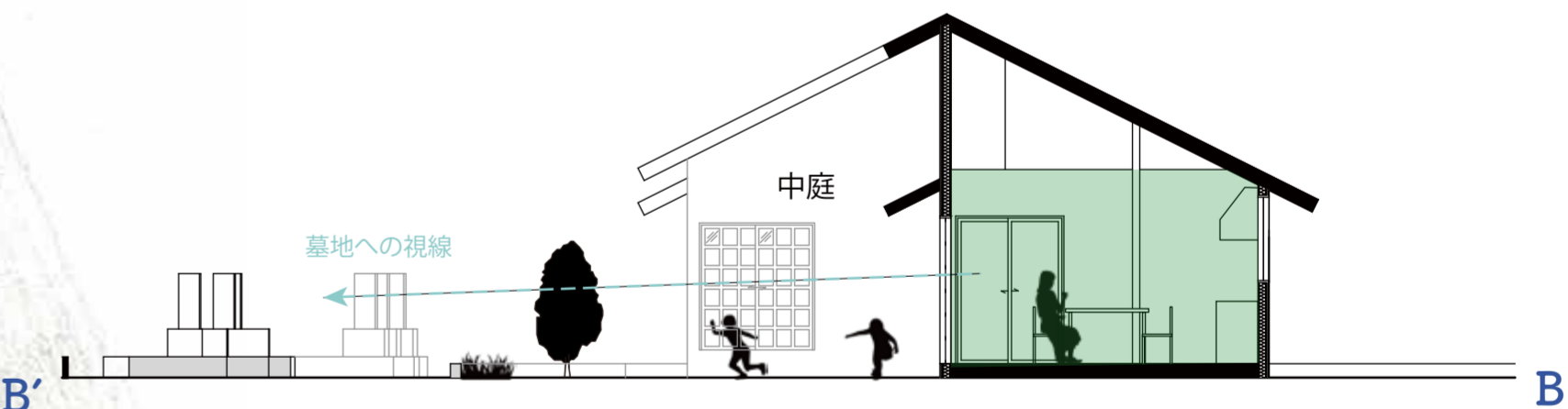
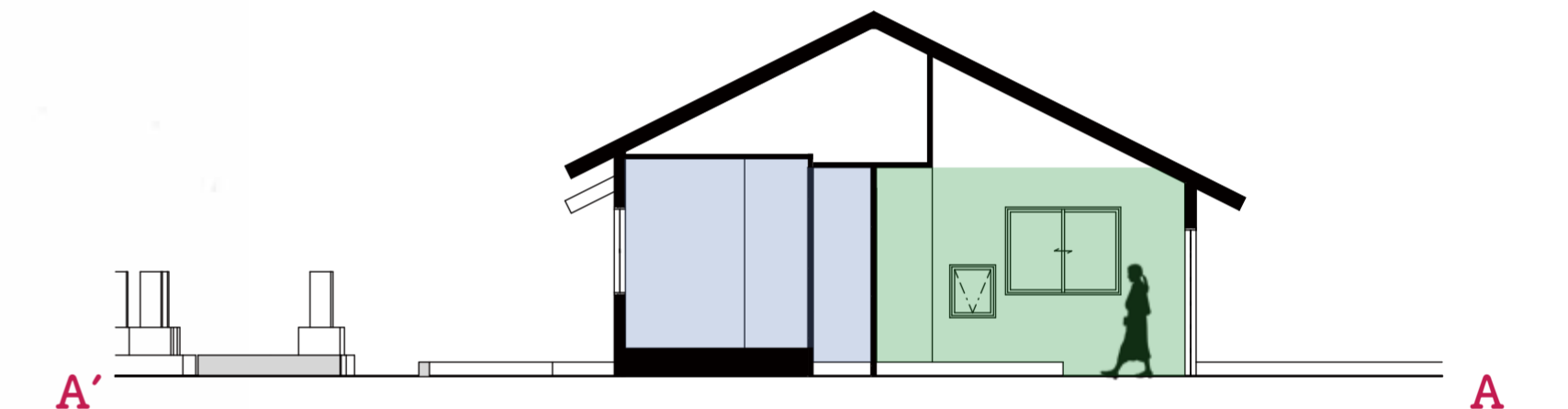
## ブドウ棚

開発前は**ブドウ畑**だった。中庭への通り道にブドウ棚を設け魅力的な屋外空間をつくる。

# 断面図

わたしのいえ    いえのふち    やねのした

S=1:100



0 1 2 5 [m]



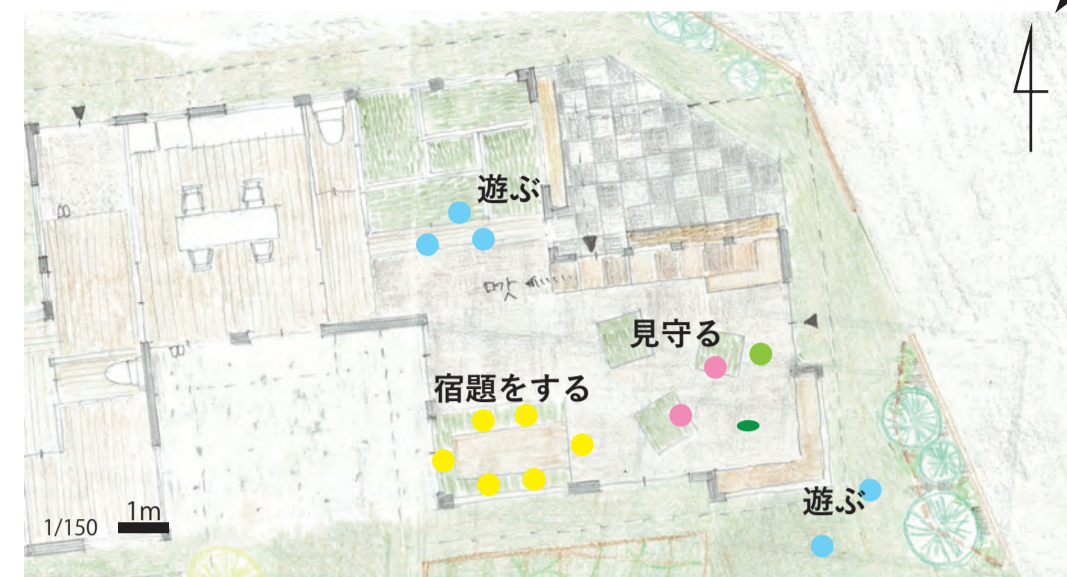
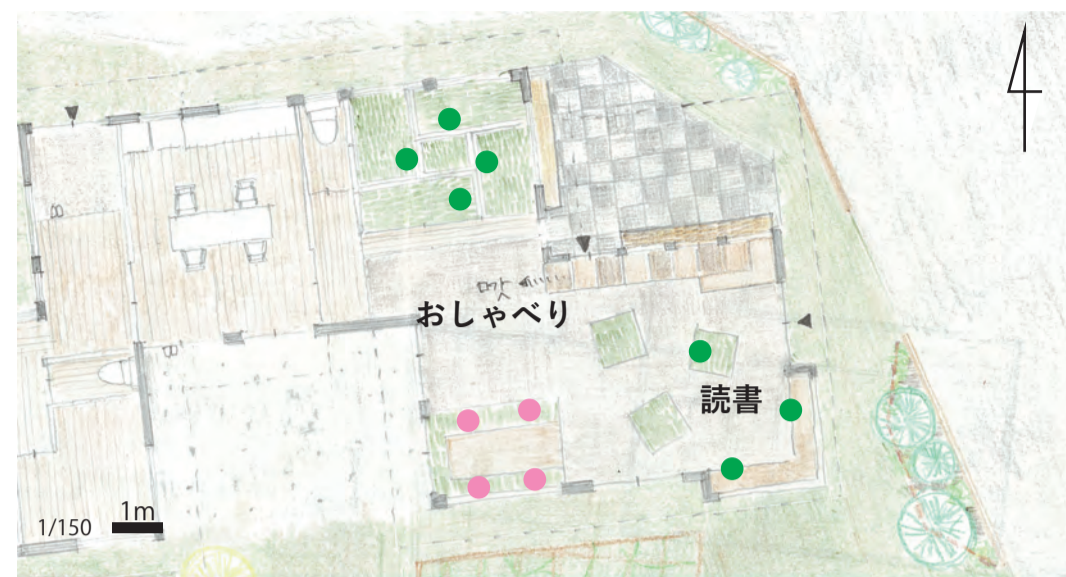
# 移り変わるやねのした

朝

昼

夕

平日



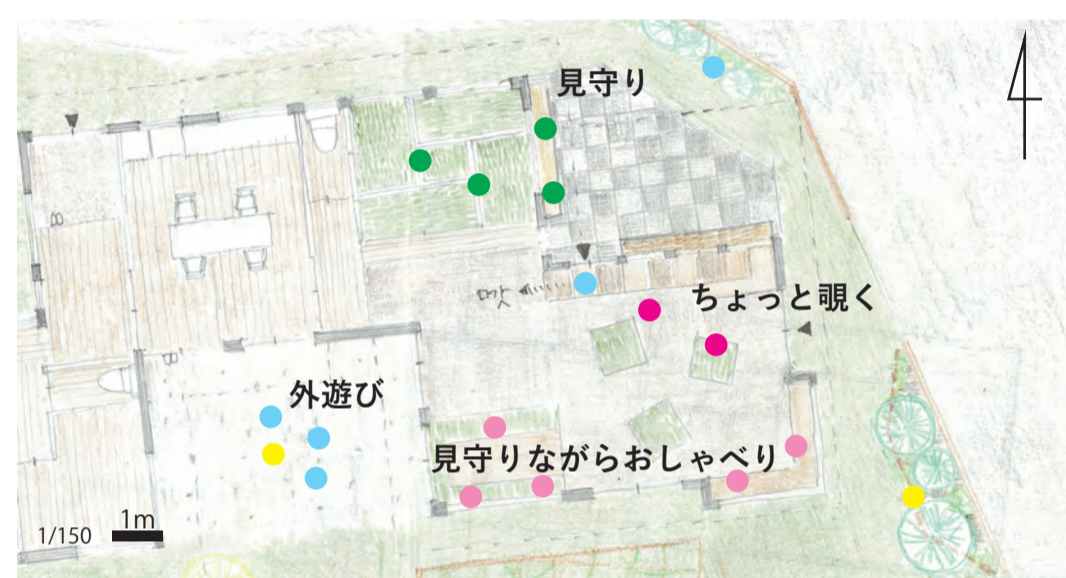
- 地域の保護者
- 中学生
- 小学生
- 高齢者
- 観光客
- イベント等関係者
- 農家

朝

昼

夕

休日

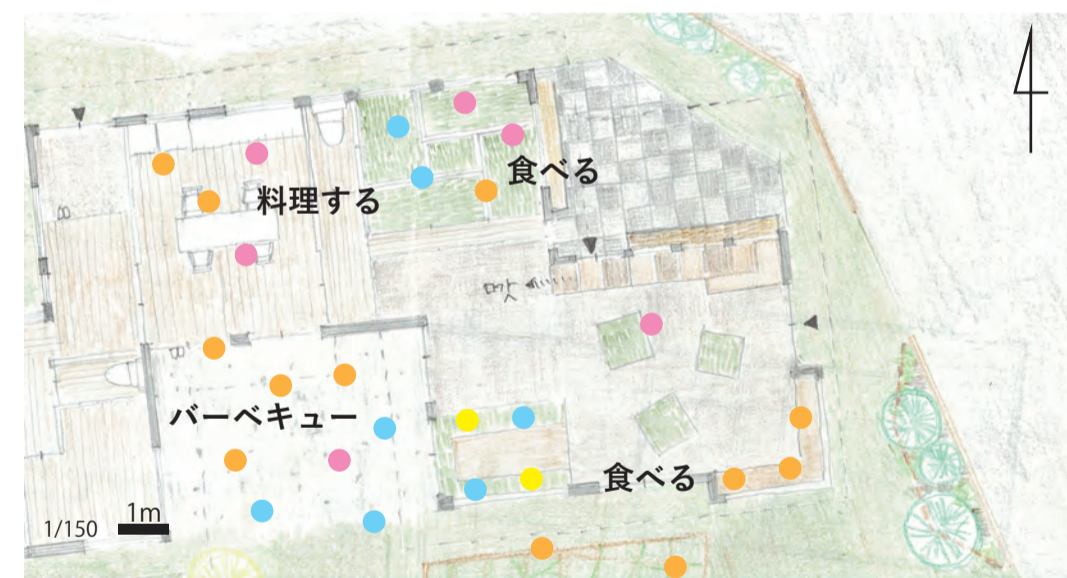
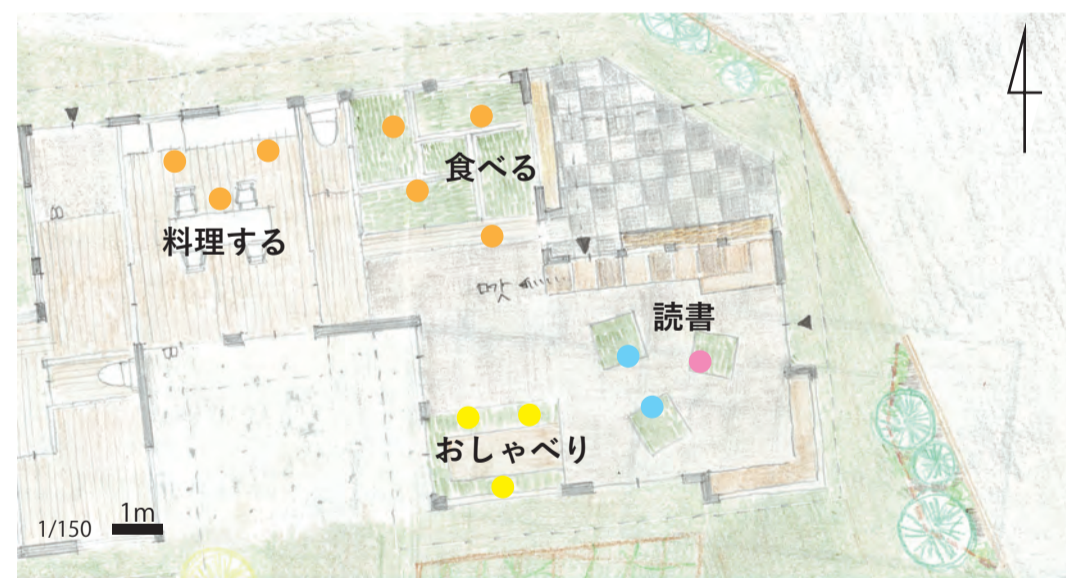
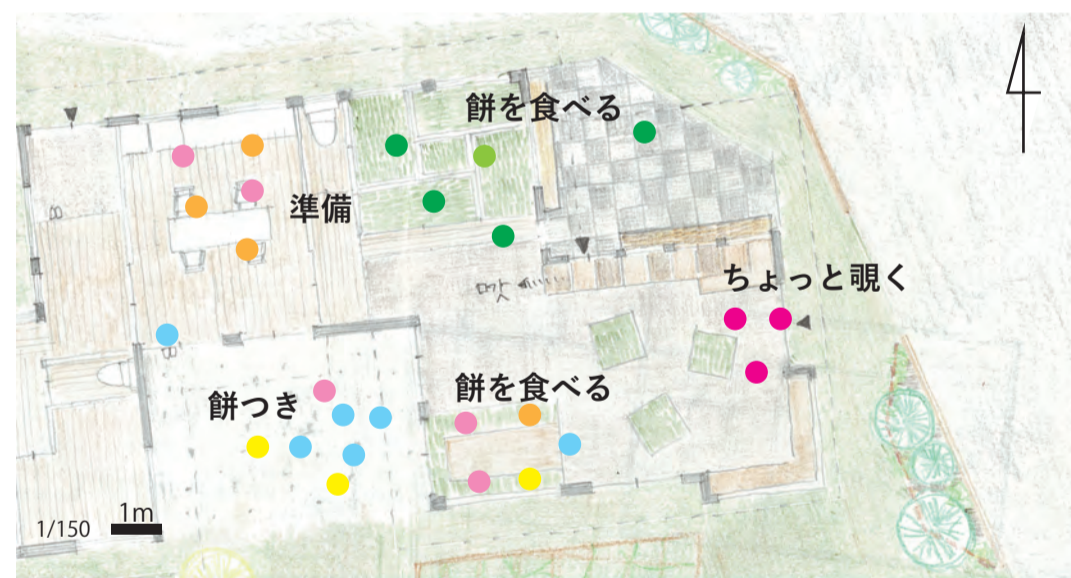


## 餅つき大会

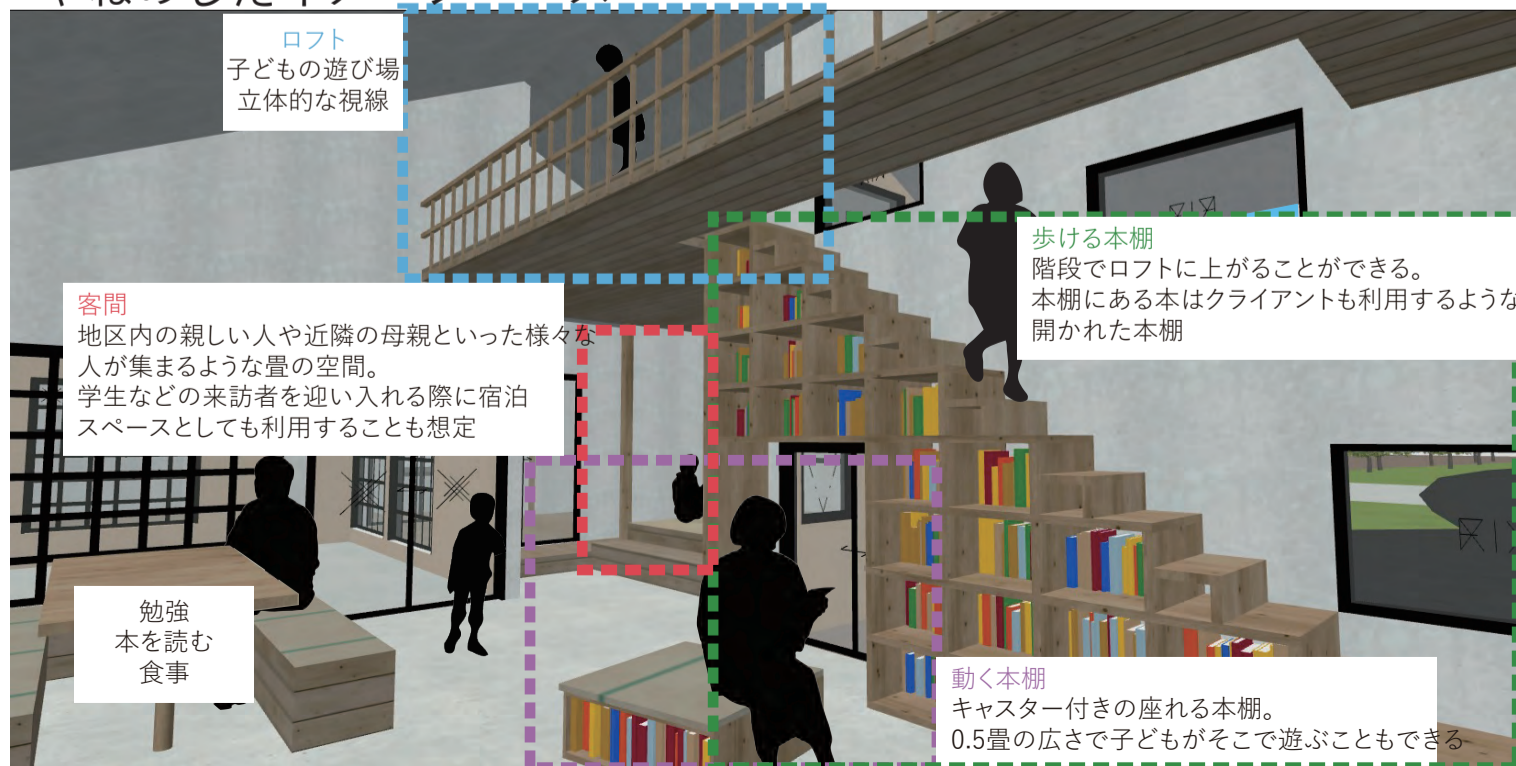
## 知り合いとディナー

## みんなでパーティー

イベント時



## やねのしたイメージパース



## やねのしたと地域のコミュニケーション

地域における従来のコミュニケーションの間として、個人の住宅や、飲食店、公民館（集会所）などが挙げられる。個人住宅はプライベート空間としてつくられていること、また飲食店や公民館などは事業者、自治会などの団体によって管理が行われるが、何か起きた時に管理責任を問われてしまうということなどから、その空間を地域に対し開く時間が限られてしまう。このようなコミュニケーションの場の空間特性もあり、宴会やお祭りなど、低頻度で濃密なコミュニケーションが主体となっていた。

しかし、COVID-19の流行によってそのようなコミュニケーションが困難になると同時に、従来のコミュニケーションに参加できる人が限られていたという事実も浮き彫りになった。このような地域のコミュニケーションの問題に対し、先述した小布施町の「オープンガーデン」の取り組みは一つの解となりうるが、屋外の庭という空間の特性上、立ち話など短時間のコミュニケーションが主体となるだろう。

一方、今回私たちの提案する「やねのした」は、個人の住宅内に外からの視線の通る、開かれた空間を作るというものである。小布施町のように地域のコミュニティが比較的強く、オープンガーデンやまちじゅう図書館といった家開きの取り組みがある程度浸透していることが前提となるが、そのような地域では家主の在不在に関わらず、開かれた空間を地域で見守ることが可能になると考えられる。

そうして地域に支えられた「やねのした」は、幅広い時間に開かれていることで、比較的高い頻度、密度のコミュニケーションや、より多様な人の参加を可能にする。これは終わりの見えない With COVID-19 において十分なコミュニケーションの確保を可能にするとともに、Post COVID-19 においても新たなコミュニケーションスタイルにより、地域のコミュニティに貢献していくだろう。